

図5 田野風頭文字体

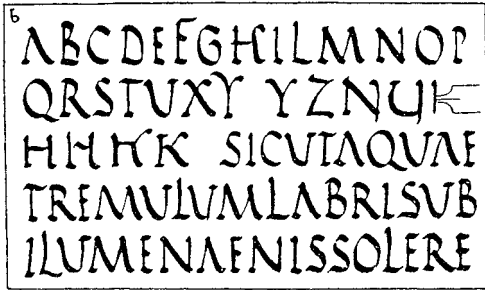
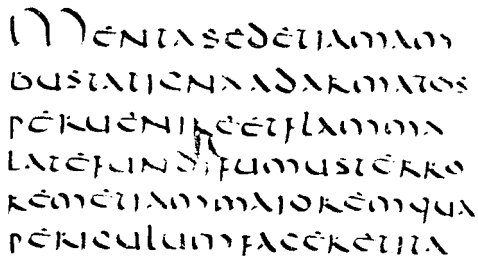


図6 アンシャル体

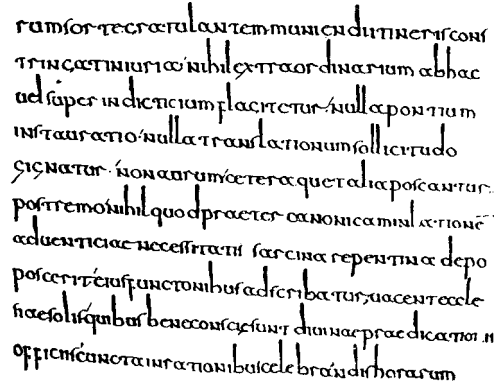


期に作られた記念碑的な建造物に刻まれた碑文の文字は、あたかも、あらかじめ区画された升目の一つ一つに整然と文字が配列され、余分な装飾も過度な省略もなく、きわめて格調の高いものである(図4)。これがいわゆる「^{かしら}頭文字体、または大文字体(Capitalis)」あるいは「記念碑体(Monumentalis)」と呼ばれ、ローマ帝国時代の最も標準的な書体とされた。のちにローマン体(Roman type)と呼ばれる活字体の大文字は、これを手本としたものである。

2) 田野風頭文字体 その後4世紀から7世紀にかけて、この頭文字体の1つの亜種として「田野風頭文字体(Rusticus Capitalis)」と呼ばれる書体が現われた。これはその名称とはうらはらに、標準的な頭文字体よりむしろ装飾的で洗練された趣があり、金石文だけでなく、ペンで書かれたパピルスや古典作品の古写本にも用いられた(図5)。この書体がRusticus(田野風)と呼ばれたのは、のちにキリスト教徒の立場から、異教的なローマ人の文字と見られたためであろう。

3) アンシャル体 一方、頭文字体のややくずれた形で、主に手写本でのペンによる手書き書体として、4世紀末から8世紀頃にかけて「アンシャル体(ウンキアリス体とも,Uncialis/Uncial)」と呼ばれる文字が発達した。これは「丸み大文字体」などと訳されるように、頭文字体が少し丸みを帯び、しかもややすづまりな字形である(図6)。この書体は、はじめ北アフリカで発達し、のちにイタリアのローマを中心にもっぱら聖書関係の文書で用いられるようになったが、そこから

図7 半アンシャル体



修道院活動を通じて、イギリスも含めたローマ領各地に広がり、高度に洗練された書体として完成した。その字体を見ると、同時代のギリシア文字のアンシャル体と呼ばれるものにならかなり近似しており、したがって、この書体は前述の「田野風頭文字体」からの自然な発達というよりも、むしろキリスト教の伝播に伴うギリシア文字の影響のもとに、キリスト教独自の文字文化の媒体として発達したものと思われる。なお、Uncialisというのは、ラテン語の度量衡の通常、最下位の単位である uncia「オンス、インチ」の形容詞形に由来し、頭文字体に比べてこの文字のやや小さめの字形を指して名づけられたものであろう。

4) 半アンシャル体 このアンシャル体とほぼ並行して、アンシャル体よりももっと字^{だけ}文がすづまり、一層小型化した感じの「半アンシャル体(Half Uncial)」と呼ばれる文字が、ほぼ同じ5世紀から8世紀の頃にかけて、やはりアフリカ北西部から広がり、とくにキリスト教関係の文書でよく使われるようになった(図7)。この「半アンシャル体」の特徴は、b, d, f, h, lの文字の縦線が上に長く、g, p, qの縦線が下に長く延び、sが縦長の形をとり、aとtの字形が丸く、gが数字の5のような形をとり、一方、nは頭文字のNと同じ形をしている点である。

5) 小文字体 これとは別に、帝政ローマ時代の終わり頃からローマ人の日常的な手書き文字として「新ローマ草書体(New Roman Cursive)」と呼ばれる早書き書体が広く行なわれていたが、ローマ帝国の崩壊後、この早書き書体と上述の半アンシャル体が結びついて、旧ローマ領のいろいろな地域で、「小文字体(Minuscule/Minuscule)」と総称される様々な書体が発達した。それらの栄えた時期は、大体、5世紀から8世紀にかけてである。

その主なものをあげると、まずフランスの西・南部の修道院で、7世紀から8世紀にかけて発達した「リュ